

活動報告：ぶんぶんクラブ

1. 「ぶんぶんクラブ」のねらい

平成27年度から子ども子育て支援新制度が本格的にスタートした。これまで我が国では、様々な子育て支援ニーズに応えるべく支援のあり方を模索し形にしてきた。このたび、施行された新制度もこの一環ではあるが、これまでより一層、妊娠・出産から育児、子どもの自立まで切れ目のない支援を行うことを目指している。

この切れ目のない支援を実現するためには、単に子育てサービスを充実させるだけでなく、いかに地域の中で長期的に一人ひとりの子どもの成長を見守るかが鍵となってくる。子育て家庭と地域の様々な世代、そしてこれから親になるであろう若者世代がつながり、子育てしやすい地域づくりとは何かを共に考え続けることが重要な取り組みである。そのためにも、地域の人々が交流し合う機会、自分の子どもでなくとも世話をして育てる機会を確保することが必要であろう。

本学で取り組む「ぶんぶんクラブ」は、こうした新制度の流れを鑑み、地域の子どもたちと大学生が日常的に触れ合うことで、地域の中に様々な世代の人々とのつながりをつくり、子育てしやすいまちづくりを地域の人々と共に考えていくことを目指したものである。

具体的には、幼児は、幼稚園の保育中および園庭開放がおこなわれる午後2時以降から夕方、児童は、学校時間外の夕方の保護者の帰宅を待つ間、大学生とふれあう時間を持つ。「ぶんぶんクラブ」のこうしたふれあい活動は、子どもたちに大学生との遊びや勉強を通じて充実した夕方の生活を提供し、大学生に子どもたちとの日常的なふれあいを通じて子ども・子育てへのリアリティの体感・教育的視点を提供している。

また、「ぶんぶんクラブ」の活動は、地域の子どもたちと大学生がふれあうことで、地域の中で安全に開かれた小学校と大学が、ともに多世代交流の拠点となり、地域の集いの場となることも目指している。その中で、子ども・青年・あらゆる世代が一緒に子育てする地域づくりを模索できればと考える。

2. 「ぶんぶんクラブ」の2014年度活動状況

「ぶんぶんクラブ」の活動は、1で記したねらいのもと、ボランティア学生とりわけレクリエーション・ボランティア研究会のメンバーを中心に、地域の幼稚園や児童館、公民館などとの交流活動を展開している。1年間の主な活動状況を以下に示す。

- ・児童館との交流：年間20回（宿題指導、遊び、卓球指導、一輪車指導など）
- ・幼稚園との交流：年間26回（保育補助、遊びなど）
- ・幼稚園・児童館・公民館などでの出前劇（七夕やクリスマス・節分など）

本年度、児童館での交流活動回数が例年より少なめであったが、そこには学生たちと地域の人々が助け合う大きな出来事があった。

2014年8月、広島市は豪雨のため大きな土砂災害に見舞われた。「ぶんぶんクラブ」が日常的に活動している安佐南区長束地域もその被害は大きく、町が元通りになるのかさえ危ぶまれる事態となった。安佐南区全体が被害者、被害地域の多さに落胆し悲しみを募らせるしかなかった。しかし、学生達は日頃のボランティア活動のつながりをもとに自ら支援場所を探し、多くの学生達に声をかけ、学生自治会と共に支援活動にあたった。「被害者の人々の気持ちを考えたら出来ることなどないようにも思っていた」と語る学生も、家屋に入り込んだ土砂を取り除き、地域の人々と声をかけ合いながら町を元に戻そうと毎日活動をする中で、「来てくれるだけで元気ができるよ」という地域の人の言葉に、つながりの大切さを実感したという。

日頃からつながりをつくることは、子育て支援の役目だけでなく、人々の安全・安心を築く大切な取り組みなのだあらためて感じる一年となった。

3. 今後の課題と将来構想

現在、地域の子童館や幼稚園、公民館のご協力のもと多くのつながりが見いだされている。学生と子どもたちとの関係性は長期的で継続的なものになりつつあり、地域の中でそのつながりの存在が知られるようになっていった。その中で、日々つながり共に助け合うことの重要性を再認識したのも本年度の大きな特徴であろう。

ただし、様々な世代が共に子育てしやすい地域づくりを考えると、この目的を達成するためにはさらなる活動の展開が必要となる。

例えば、大学が地域に対してオープンな施設となり、様々な世代が地域のまちづくりを考える機会を提供していくことも大切な取り組みである。

このたび、未曾有の土砂被害の中、学生達はよりオープンに地域の人々の声をひろい、支援の手を積極的にのばしていった。その姿は、垣根を取り払いつながることこそ安心・安全なまちづくりへの大切な一歩であることを教えてくれた。もし、『子育てしたくなる地域づくり』にむけて、大学が地域全体でつながることの魅力が次世代に伝えることが出来たならば、未来へ向けてより安全で安心なまちづくりへ一役担うことができるのでは

ないだろうか。

最後に、大学生は日常的な子ども達との交流により、地域の人々とのつながりの大切さや子ども・子育てのリアリティを実感している。そして、自分たちが地域の担い手になるという意識も高めつつある。「ぶんぶんクラブ」の活動を通じて大学生という次世代の子育てパワーを活用し、『子育てしたいまちづくり』を大学から地域に発信していくことが重要な取り組みになると思われる。そしてこの取り組みは、今後の地域活性化の一つの大きな原動力になると5年間の活動を通じて実感しているところである。

(文責：学芸学部 子ども学科

佐々木尚美・若林 紀乃)